

選手と子供たちが手をつないでバンクに登場 「ステキな村の競輪場」ならではの誇らしい光景



2013年の寛仁親王牌。その最終日に行われた決勝メンバーの特別紹介で、サッカーの選手入場シーンと同じように、決勝メンバー9人と、弥彦小学校の児童9人が手をつないで敢闘門から入場してきました。ステージで、子供たちからレイをかけてもらい、お返しに選手がサイン入りキャップをプレゼント。終始にこやかな表情で、子供たちと話したり、頭をなでたり。

弥彦村では競輪のことを小学校で教えています。1976年、弥彦小学校3、4年生向けの社会科副読本が発行され、今は改訂版が出ていますが、35年前は『競輪のある村』として、こう書かれてありました。

「わたしたちの村には、新潟県でただ一つの競輪場があります。」

(中略)

競輪のある日は、朝から村は活気づきます。それは、競輪のため

にはたらいっている人が村には大ぜいいるからです。

(中略)

競輪は村がやっている仕事の一つです。競輪によって、村には大きな収入が入ります。

それらのお金は、老人や子どものために使ったり、農業や商工業をさかんにするためにまわしたり、学校のしせつ、せつ備をととのえたりする費用にしたりして、ゆたかな村づくりにたいへん役立っています」。

ちなみに彌彦神社の周辺のマインホールの蓋には、弥彦山、ロープウエー、そして競輪選手が走っている姿が描かれています。人口約8,000人の小さな村は、競輪に本気です。

▽弥彦競輪 寛仁親王牌

世界選手権記念トーナメント

思いつくまゝ回顧録 第2話

【新潟スポーツ 信氏 忠】

